

〔課題演習抄録〕

運動の楽しさや喜びを味わえる体育科授業研究の一考察 —多様な活動機会を確保する学習環境に着目して—

岡 村 峻
Ryo OKAMURA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：運動，楽しさ，体育，学習環境，活動機会

1 研究の目的

本研究は、体育科授業における学習環境に着目し、学習者の関心や課題に応じた多様な活動機会の確保により、学習者が運動の楽しさや喜びを味わうことができる可能性の検証を目的とする。

体育科授業については様々な研究が行われている中、徳永(2009)は体育の授業に対する学習者の意識において、「教師活動」に続き「学習環境」に関する記述が多いことを明らかにしている。このことから、学習環境に対する学習者の関心は高いと考えられる。学習環境とは、幼児児童生徒の学習に影響を与える場面的・背景的な要因であるとされ、広義には、学習の直接的な対象となる学習材の内容や種類などを含むと定義づけられる(学校教育辞典, 2014)。また、学習環境に関する記述の内容の大半が、「場づくり」についてであり、「場づくり」の手立ての効果を認める記述が多い(徳永, 2009)。「場づくり」は、コートの大きさ、形、ゴールの位置等、教師の意図が込められており、換言すれば教育内容を典型的に含み込ませた教材づくりの具体である(佐々・中島, 2011)ことから、教材開発にあたっては「場づくり」を重視し、学習者にとって考えたり工夫したりする余地のある学習環境の設定が必要であると考え。さらに、成家ら(2009)は、夢中で行っている最中の子どもには「楽しい」または「動く感じ」は自覚しづらいことから、単元を通して子どもが「楽しそう」または「やってみたい」と思えるような場づくりに留意する必要があることを示唆している。中学校学習指導要領解説保健体育編(2017)においても、教科の目標を実現するために、生徒が運動の合理的な実践を通して、その楽しさや喜びを味わうことができるようにすることの重要性が示されてお

り、体育科授業において学習環境への着目は大変意義深いと考える。本研究において検討する授業の具体は、学習環境に着目し、学習者の関心や課題に応じた多様な活動機会が確保される体育科授業である。これらにより、学習者は運動の楽しさや喜びを味わいやすくなることが推察される。

2 研究の計画

本研究は、授業実践及び質問紙調査を行うことによって、学習者が運動の楽しさや喜びを味わうことができる可能性を検証する。

授業実践後の分析及び質問紙調査には、高田ら(2003)の診断的・総括的授業評価「体育授業についての調査(中学校用)」を用いた。これは、「体育では、せいっぱい運動することができます」などからなる20の質問項目に対して、学習者が「はい」「どちらともいえない」「いいえ」の3件法から回答することによって、「たのしむ(情意目標)」「できる(運動目標)」等の4項目・次元の得点及び総合評価が算出されるものである。特に、「たのしむ(情意目標)」の得点は、本研究の目的である運動の楽しさや喜びを味わえる体育科授業であったか否かの判断規準として適切であると考え。加えて、授業実践後の分析は、学習者からの授業の感想等の聞き取り調査や学習カードの記述内容を対象とした。

また、質問紙調査は、実践授業とは異なる一単元の学習後に、実際に学習した授業と本研究において検討する授業について、高田ら(2003)の授業評価の「たのしむ」に関する質問5項目の調査を実施した。さらに、検討する授業については、高田ら(2003)の授業評価に加え、良さそうな点や楽しそうな点及び不安な点や難しそうな点について記述形式で回答を求め、分析の対象とした。

3 研究の内容

授業実践は、公立 A 中学校第 1 学年の保健体育科「水泳」における「クロール」を取り扱い、本実践は初回の記録測定にて振り分けられた 1 コースの 12 名を対象に実施した。全 6 時間中、1 時間目及び 6 時間目には記録測定が行われ、残りの 4 時間のうち後半の 2 時間において本研究に関わる実践を行った(2019 年 6 月 19 日及び 21 日)。実践では、自己の課題の確認も踏まえたウォーミングアップ(以下、W-up)後、グループ及び活動内容を選択させた(表 1)。

表 1 選択させたグループ及び活動内容

実践 1 回目	実践 2 回目
浮力実感グループ (①クラゲ浮き②だるま浮き③またくぐり④プールの底にピタッコン)	ストローク+息継ぎグループ (①大またクロール②手タッチクロール③ビート板バタ足)
ストリームライングループ (①伏浮き②けのび③いかに流し)	ストリームライングループ (①伏浮き②けのび③いかに流し)
ストリームライン+バタ足グループ (①ストリームライン+バタ足②腕組みバタ足③気をつけバタ足)	ストリームライン+バタ足グループ (①ストリームライン+バタ足②腕組みバタ足③気をつけバタ足)

W-up では、自己の課題を客観的に認識させるため、学習者間で技能チェック表をもとに他者評価を実施させ、その結果も踏まえて活動内容を選択させた。また、各グループには学習内容や技能ポイントが記載された学習補助資料を配布し、同グループ内でのペア学習により授業を進行した。さらに、活動場面では学習者と教師が活動内容を認識しやすくするため、学習補助資料の台紙の色と統一させたカラーテープを手首に装着させた。

「体育授業についての調査(中学校用)」の結果、総合評価(47.45~60 が「+」)の平均得点は単元前で 51.9、単元後で 52.3 であり、「たのしむ」(12.11~15 が「+」)の平均得点は単元前で 12.8、単元後で 12.9 であった。単元後の総合評価及び「たのしむ」の得点は上昇しており、診断基準は「+」の評価であったことから、学習者が運動の楽しさや喜びを味わうことはできたと推察できる。また、聞き取り調査の結果、学習者から「できないところを徹底的に練習できたのが良かった」や「できていないところが分かって新しいチャレンジをできたのが楽しかった」などと肯定的な意見を聞くことができた。さらに、当該学習者らの総合評価や「たのしむ」の得点の上昇から、本研究における学習環境が有効であったと推察する。

質問紙調査は、授業実践と同じく公立 A 中学校第 1 学年の生徒 93 名を対象に、男子生徒は「サッカー」、女子生徒は「バスケットボール」の単元後に実施した(2019 年 11 月 27 日及び 28 日)。調査の結果、「たのしむ」の平均得点は実際に学習した

授業において 13.7、本研究において検討する授業において 13.8 であり、診断基準は「+」の評価であった。また、本研究において検討する授業は、実際の授業と比較して「たのしむ」の質問 5 項目のうち 4 項目で得点が高かったことから、学習者は運動の楽しさや喜びを味わえると推察できる。さらに、本研究において検討する授業について、学習者からは「関心のある練習のため、楽しくできるし積極的に取り組める」や「課題点に集中して取り組めるなど、自分に適した練習ができる点が良いと思う」といった意見が多く得られた。

4 成果と課題

(1) 成果

授業実践後の分析や同一単元での比較検証の結果から、学習者の関心や課題に応じて多様な活動機会を確保することは、学習者が運動の楽しさや喜びを味わえることにつながる可能性が高いと十分に判断できる。また、聞き取り調査や質問紙調査の結果から、学習者の実態として本研究による学習環境の必要性は高いと判断でき、今後も検討する価値があると考ええる。

(2) 課題

今回の授業実践では、単元を通した実践及び検証はできていない。したがって、中・長期的に継続した実践により、本研究において検討する学習環境と学習者の運動の楽しさや喜びを味わうこととの関係がさらに明確になると考える。また、学習者が不安な点として挙げていた「活動場所の確保」や「活動時の教え合いの可否」についても検討することで、学習者が運動の楽しさや喜びを味わえる体育科授業の実現につながると考える。

引用・参考文献

- 今野喜清・新井郁男・児島邦広(編) 2014 第 3 版学校教育辞典 教育出版
 文部科学省 2017 中学校学習指導要領解説保健体育編
 成家篤史・鈴木直樹・寺坂民明 2009 「感覚的アプローチ」に基づく跳び箱運動における学習の発展様相に関する研究-「動く感じ」を中核とした意味生成に着目して- 埼玉大学紀要 教育学部 第 58 巻 第 2 号 pp.55-69
 佐々敬政・中島友樹 2011 体育科における「遊び」の定義と実践における有効性と可能性 教育実践学論集 第 13 号 pp.277-288
 高田俊也・岡澤祥訓・高橋健夫 2003 体育授業を診断的・総括的に評価する 高橋健夫(編)体育授業を観察評価する 明和出版 pp.8-11
 徳永隆治 2009 模擬授業による体育授業づくりの意識形成に関する事例的研究 安田女子大学紀要 第 37 巻 pp.197-207